



# 清朝末期における留日師範生の教育実態に関する研究 : 宏文学院と東京高等師範学校を中心に

邵, 艶  
船寄, 俊雄

---

(Citation)

神戸大学発達科学部研究紀要, 10(2):383-398

(Issue Date)

2003-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCoDOI)

<https://doi.org/10.24546/81000520>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81000520>



# 清朝末期における留日師範生の教育実態に関する研究 ——宏文学院と東京高等師範学校を中心に——

邵 艶\* 船寄 俊雄\*\*

A Study on the Education Condition of Chinese Normal School Students  
in Japan in 1890's~1900's

SHAO YAN Toshio FUNAKI

## I はじめに

中国における近代教育は、明治期の日本の教育をモデルとして始められたものである。その過程において、留日学生の貢献には大きなものがあつた。清朝統治の維持を目的とする清末の教育改革は、最初に着手されたのは速成教育であつた。とくに、近代教育の普及に差し迫って必要な教師を速成的に育成するために、清政府は師範留学生を大量に派遣する方針を採つた。1903（明治36）年から1907（明治40）年にかけて、最高1万名を超える各分野の留日学生のうち、速成師範生はその主流であつた。例えば、当時の清国留学生会館の報告によると、1903（明治36）年4月から1904年4月までの留学生卒業総数は299名で、そのうち師範生は157名で、総数の52.5%を占めていた<sup>1)</sup>。

筆者の関心は清末の中国人日本留学生在が中国教育近代化のために果たした役割を歴史的に検討することである。近年、中国人日本留学に関する歴史的な研究は少なくないが、清末における留日師範生の教育に関する研究は非常に少ない。その一つの原因としては、初期の師範留学の主流が速成的であつたため、学生の入学時期、在学期間、教科内容、卒業後の進路など、当時の教育実態の再現が困難であることが挙げられる。清末の留日師範生たちが中国教育近代化のために果たした役割を理解するには、まず留日師範生の教育実態を解明しなければならない。本論文は清末師範留学の中心校であつた宏文学院および東京高等師範学校に焦点を当て、清末における留日師範生の教育実態を検討するものである。

## II 宏文学院の概況

宏文学院の留学生教育については、蔭山雅博をはじめとする研究者たちの先行研究が存在する<sup>2)</sup>。蔭山の研究によって、在学生に関する統計数値の整理、教育内容の研究、教員名簿の整理など、重要で基礎的な知見の蓄積が行われてきた。しかしながら、蔭山の研究は中国側に残された史料をほとんど使用しておらず、宏文学院の留学生教育の全貌を明らかにしたとは言い難い。例えば、在籍者の来日前の状況や、学校を出た後の進路、帰国後の活動については明らかにされていない。留日師範生たちは、一体どのような心境で日本に渡つたのだろうか、彼らの目に触れた日本の教育はどのようなも

\* 神戸大学大学院総合人間科学研究科博士課程

\*\*神戸大学発達科学部教育科学論講座、神戸大学大学院総合人間科学研究科人間形成論講座

（2002年10月31日 受付）

（2002年12月11日 受理）

のであったのか、また彼ら自身が語った留学教育および留学生生活はどのようなものであったのか、留日師範生の教育を理解するためには、これらの事実の解明が必要である。

本論文では、蔭山などの先行研究に学びながら、出来る限り中国側の史料を駆使し、宏文学院への留日師範生派遣の経緯、留学生来日前の状況、日本滞在中の生活と教育、卒業後の進路、帰国後の活動などについて明らかにしたい。

## 1 設立の経緯と沿革

日清戦争終了の翌年の1896（明治29）年、清政府は初めて13名の官費留学生を日本に送った。これは清国駐日公使館が翻訳者を育成するため派遣したものであった。当時、東京高等師範学校長であった嘉納治五郎は、文部大臣兼外務大臣西園寺公望の依頼を受け、この最初の清国留学生の教育を引き受けた。嘉納は、13名の留学生のために神田三崎町に塾舎を設け、自ら監督を担当する一方、本田増次郎を主任に、他教師数名を招聘して、日本語・日本文法および普通科の教授を始めた。これが日本における中国人留学生教育の創始である<sup>3)</sup>。

1899（明治32）年、最初の卒業生7名が優秀な成績で卒業した。同年、張之洞派遣の学生11名が入学、塾舎が拡大され、亦楽書院と名づけられた。さらに、入学希望者が急増したため、1902（明治35）年1月、制度内容を充実して、校舎を神田三崎町から牛込西五軒町に移転、名称を「宏文学院」と改めた。宏文学院の設立について、当時の雑誌『同仁』は次のように述べた。

清国学生の我に来る者実に日一日より多し、そして我国諸学校中未だ清国学生の為に特設せられたるものあらず、是に於てか彼等攻学の道途に多くの阻滞を生じ、視て以て缺憾を為すべきもの尠からざるに至れり、嘉納校長深く之を憂ひ、三十五年始めて一校を牛込西五軒町に設け、名けて宏文学院と曰ふ、是れ実に同学院設立の由来なり<sup>4)</sup>

学院が設立された1902（明治35）年7月から9月にかけて、嘉納は清国の教育視察に渡り、清政府側の要人を歴訪して様々な意見の交換を行った。帰国後、「東遊の学生其の官費たると自費たるとを問わず均しく来りて此に学ぶもの日に益に多く、遂に校舎の狭隘を告ぐるに至」り、西五軒町の本校だけでは収容しきれなくなったので、1903（明治36）年には大塚分校を、翌年には麴町区に麴町分校舎、下谷区に真島分校舎、神田区に猿楽町分校舎、巣鴨区に巣鴨分校舎を増設した<sup>5)</sup>。

1905（明治38）年、「清国留学生取締規則」事件<sup>6)</sup>で多数の留学生が帰国したため、麴町・真島・猿楽町の各分校舎を閉鎖したが、1906（明治39）年には牛込区に白銀分校を新設した。1909（明治42）年の閉鎖に至るまでの8年間に、宏文学院は前後7,192名の留学生を受け入れ、3,080名の卒業者を送り出した<sup>7)</sup>。後に述べるように、これらの留学生のなかには、後に中国の政界、文学界、教育界、革命などの各分野で活躍した著名人が少なくなかった。

## 2 留日師範生教育における嘉納治五郎の見解

弘道館所蔵「宏文学院章程」、『宏文学院一覽』などの第一次史料に基づく蔭山の研究によれば、宏文学院創立の主旨は、(1) 留学生のために中等普通教育を実施し日本の高等教育機関への進学に努めること、(2) 速成教育を実施し、中国国民教育の普及に必要な教員を養成すること、(3) 近代法政国家に不可欠の警務官を養成することにあつた<sup>8)</sup>。

つまり宏文学院は、中等普通教育、速成師範教育、警務官教育を同時に行うことを目指したのである。そして実際の運営においては、留学生の増加に伴って「在学期間、授業科目の多種多様な省別速成普通科の編成を実施し」、「教育の中心部を速成教育に置いた」のであつた<sup>9)</sup>。

では、なぜ宏文学院の実際の運営が創立当初の主旨と異なってきたのか。もちろん、清政府側の要望や留学生数の急増などの理由があったが、その他、経営者側の指導方針も大きく作用したと考える。宏文学院の実際の方針を理解するためには、学院長である嘉納の中国人留学生教育に対する見解を知る必要がある。この点について、嘉納は中国人留学生教育について次のように述べていた。

支那人の本邦に來遊するは固より賛成するところにして現に過般來弘文学院なるものを起して其養成に努めつつあり監督の歲月尚短かければ効果の如何は予知す可からざるも今後益々彼等の教養には力を尽くす積りなり特に支那留学生を歐米諸國に派遣せしむべきや或は我邦に渡來せしむべきやの問題に就ては自分は最も日本に留学をせしむるの得策たるを信ずるものなり其の理由の重なるものは経費の多少は勿論第一彼我道德主義の根底を一にすることは最も養成に便利を感じるところにして留学生自身も異文異教の土地に於て修業するに比すれば其感覺も同日の談にあらざる可し（中略）要するに支那と歐米との文化の程度事情等は懸隔甚だしきに過ぎるがゆえに支那留学生の養成するところとしては本邦を以て最も適當とす可きなり<sup>10)</sup>。

この一文から嘉納の中国人留学生教育に対する熱意がうかがえよう。宏文学院経営のためには中国の国情を知らなければならず、また、留学生を派遣する清政府側との交流も大事であるため、前述のように嘉納は中国を訪問したのである。清政府側の要人である慶親王、榮慶、張之洞、張百熙などと中国の教育問題について多くの意見を交わした。その訪問会談の様子は日本で報道された。以下はその一部である。

貴國刻下の情況に應じ、諸般の教育に於て、速成的留学生の急とするの必要あるべしと雖も、根底ある教育は決して速成を以て期すべからず、必ずや普通教育を終り、専門教育に入り深遠なる研究に身を委せしものに頼らざるべからず、今貴國に於て此の種の留学生を派遣するに於て、一日を遅くすれば國運の進歩に於て一日遅くすべし、故に速成的留学生を派遣すると同時に少年を派して他日國家の爲め深遠の學に依り、國家經營の任に當るに堪ゆるものを造らざるべからず<sup>11)</sup>。

嘉納は、清政府の教育政策関係者たちに、教育改革に関して普通教育や専門教育など各種教育の優先順序を示す一方、新教育を推進するために海外へ留学生を派遣する政策の重要性を説いた。具体的な建議としては、中国の実情に應ずる「速成留学生」の派遣が「刻下の急務なるべき」ことを主張する一方、将来のことを考えて、長期修学の留学生を派遣すべきことを清政府に勧めた。つまり、留学生の派遣において速成的で短期の利益を求めるだけではなく、長期的な視野をもつことが大切であることを説いたのである。このような中国の現状と将来のことをよく考慮した懇切な意見は、後の清政府留学生派遣政策に一定の影響を与えた<sup>12)</sup>。

次に、留日師範生の派遣に関する嘉納の観点をみてみよう。1901（明治34）年から中国では近代学校の建設が始まった。その際、伝統的な書院教育や私塾教育を改め、近代的な学堂教育を推進するために、新教育を担う教師の不足が極めて大きな問題であった。速成的に師範人材を育成するために、清政府は各地で3ヶ月程度の速成教員養成機関として師範伝習所を設置する一方、速成師範留学生を日本へ派遣する方針を採った。

師範人材の速成的育成を期待する清政府側の要望に対して、日本の師範教育の権威でもある嘉納は、中国では「完備せる師範学校を設定するを得るに至る迄は、暫く速成師範学校を興して以て刻下の急需を充たすも可なる」も、「師範科速成留学生の中から、優秀の者を選抜し、さらに2カ年延長して十分に研究せしめたら、必ず清國のために有益である」<sup>13)</sup>と、中国の近代学校建設初期における速成

師範教育の必要性を語る一方、速成師範留学生のうちから優秀な者を選抜して、さらに完全なる師範教育を行うことを建議したのである。

そして師範教育の内容について、2点の指摘を行った。第1点は、師範教育が「単に普通教育を教えるのではなく、高等教育の要点も修めるべき」であり、「各種学問に通暁することが師範の一つの特質である」ということである。第2点は、師範教育が「普通教育の知識を授けると同時に、師範生に教えることの楽しさを感じさせ、教育という仕事の重要性を認識させること」が「最も大切である」ということであった。さらに後者については、具体的に論及した。すなわち、「初等師範教育というのは中学教育に近い、つまり普通教育の上に教育学、教育史、教授法、管理法、心理学などが加えられたもの」であり、実際にこれらの諸科目を教える時に、「まず師範生に教育大要を理解させることは重要である」ということであった。「管理法」というのは、「学校の諸事務を管理することと学生を管理すること」の2つの目的をもっており、「一人の教師が沢山の生徒を相手にしなければならず、「生徒の状況もそれぞれ相違がある」ため修得しなければならないと述べた。また「知識の教授には技術が要る、いわゆる知識の融会貫通」である。ゆえに、師範生は教授法を修めなければならないとも述べた<sup>14)</sup>。

以上に述べた嘉納の留日師範生教育に関する意見が、宏文学院の経営や師範科目の設置などに大きく影響したと考えられる。宏文学院では中等普通教育、速成師範教育、警務官教育が同時に行われたが、最も力を入れられたのが速成師範教育であった。「師範科速成留学生の中から、優秀の者を選抜し、さらに2カ年延長して十分に研究せしめ」と主張する嘉納校長の推薦によって、速成師範科を修了した留学生のなかから東京高等師範学校に入学した者も実際に少なくなかった。この点については、後述する。

### Ⅲ 宏文学院における留日師範生教育

#### 1 速成師範生の来日

留日師範生来日の経緯について、蔭山の研究ではほとんど触れられていないが、氏の研究に基づくと、宏文学院が設立された1902（明治35）年1月に入学した留日師範生の出身省は表1のとおりである。

表1 宏文学院速成師範生・師範生の出身省（1902年度）

| 省 別     | 広東 | 湖北 | 湖南 | 江蘇 | 浙江 | 四川 |
|---------|----|----|----|----|----|----|
| 速成師範生人数 | 23 | 12 | 11 | 9  | 5  | 1  |
| 師範生人数   | 2  | 20 | 7  | 6  | 3  | —  |

〔備考〕 蔭山雅博「宏文学院における中国人留学生教育について（2）」『昀沫集』5、学習院大学史学会、1987年より作成。

表1をみると、設立された年に最も多くの速成師範生を送ったのは広東省であった。その後湖北省、湖南省、江蘇省、浙江省、四川省と続く。ここで興味深いのは、1902（明治35）年に最も積極的に多くの速成師範生を派遣した広東省は、その後速成師範生の派遣をほとんど行わなかったことである。その原因については後に詳しく述べる。

まず最も早く留日師範生を送った<sup>15)</sup>湖南省の速成師範生派遣の経緯をみてみよう。『光緒二十九年正月十九日（1903、2、16）撫院俞（廉三）奏設師範館及統派出洋留学折』に次のような記述がある。

清朝末期における留日師範生の教育実態に関する研究

従来の教法は暗記、考古、学芸を重んじ、解説や時事などがほとんど無視されてきた。このような従来の旧書院教育を改めるには新しい教員が早急に必要である。目下、大量の蒙小学堂を創設するための教員不足の実情は悩ましい問題である。去年、朝廷に奏請して、速成師範生11名を日本へ派遣した。これらの師範留学生に学校制度を考究させ、その帰国を待って我省興学の参事を担当させるのである。(中略) 去秋、日本高等師範学校校長嘉納治五郎が来省した際、氏と面談し、あらためて我省から品行端正の貢生24名を宏文学院へ派遣し、そこで一年半の予備教育を終えてから、さらに日本の師範学校や理、法、工、農各専門学校へ進学させる。三年後彼らが帰省したら、各小学堂および各実業学堂の教員に充てる<sup>16)</sup>。

上の記述をみると、近代教育の先進省である湖南省では、1902(明治35)年から旧式書院、私塾の新式学堂への改組が始まった。教員の急需に対処するために、日本へ速成師範生を派遣するのが最も手っとり早く、有効な方法であると考えられたのである。新教育の担い手として期待された留日師範生の選抜において、「品行端正の貢生」であることが条件であった。湖南省だけではなく、師範生の派遣において、全国の各省で同じような状況であった。

次に、1904(明治37)年に一度に160名の速成師範生を宏文学院に派遣した四川省の場合をみてみよう<sup>17)</sup>。師範人材を育成するために、四川省は1902(明治35)年に成都錦江書院を師範学堂に改組し、305名の学生を募集して、6ヶ月間の速成師範教育を行った。一方、「各県から官費留学生一名或いは二名を選抜して、日本宏文学院へ速成師範を勉強させ、卒業後各県で師範伝習所を開設させ、或いは教育行政や、新式学堂の職務に担当させ」た<sup>18)</sup>。四川省でも、新教育を担う師範伝習所の教員や教育行政官、および学堂職員などの教育人材の急需に対処し、全省内から留日師範生を選抜し、宏文学院に派遣したのである。

では、宏文学院に入学した速成師範生たちは、来日前にどのような教育を受けていたのか。ここでは、近代師範学堂の建設において全国の先進省であった湖北省を例にして、考察することにする。

まず、蔭山の研究に基づき、1902年度宏文学院に入学した湖北省の師範生の名簿を整理してみた。

表2 宏文学院湖北省師範生名簿(1902年度)

| 姓 名 | 在学年限                  | 年 齢 | 所 属     | 留学資格 | 出身地 | 来日前の所属 |
|-----|-----------------------|-----|---------|------|-----|--------|
| 金華祝 | 1902 年 6 月～1903 年 2 月 | 28  | 8 ヶ月速成科 | 官費   | 黄陂  |        |
| 喻懷亮 | 1902 年 6 月～1903 年 2 月 | 28  | 〃       | 〃    | 恩施  |        |
| 李歩青 | 1902 年 6 月～1903 年 2 月 | 22  | 〃       | 〃    | 京山  | 經心書院   |
| 李実栄 | 1902 年 6 月～1903 年 2 月 | 28  | 〃       | 〃    | 孝成  |        |
| 左徳明 | 1902 年 6 月～1903 年 2 月 | 27  | 〃       | 〃    | 應城  |        |
| 張繼煦 | 1902 年 6 月～1903 年 2 月 | 26  | 〃       | 〃    | 荊州  | 兩湖書院   |
| 羅 襄 | 1902 年 6 月～1903 年 2 月 | 28  | 〃       | 〃    | 江夏  |        |
| 王式玉 | 1902 年 6 月～1903 年 2 月 | 21  | 〃       | 〃    | 安陸  |        |
| 憑開濬 | 1902 年 6 月～1903 年 2 月 | 29  | 〃       | 〃    | 南漳  |        |
| 周龍驤 | 1902 年 6 月～1903 年 2 月 | 25  | 〃       | 〃    | 麻城  |        |
| 李 金 | 1902 年 6 月～1903 年 2 月 | 33  | 〃       | 〃    | 州   |        |

|      |                       |    |     |    |      |      |
|------|-----------------------|----|-----|----|------|------|
| 談錫恩  | 1902 年 5 月～           | 28 | 師範科 | 〃  | 宜昌   |      |
| 胡 鍾  | 1902 年 5 月～           | 21 | 〃   | 〃  | 汚陽   |      |
| 陳鴻業  | 1902 年 5 月～           | 23 | 〃   | 〃  | 湘陰   |      |
| 陳文哲  | 1902 年 5 月～           | 28 | 〃   | 〃  | 広済   | 両湖書院 |
| 李 熙  | 1902 年 6 月～1903 年 2 月 | 31 | 〃   | 〃  | 漢川   | 両湖書院 |
| 程明超  | 1902 年 5 月～           | 23 | 〃   | 〃  | 黄岡   |      |
| 萬声揚  | 1902 年 5 月～           | 22 | 〃   | 〃  | 江夏   |      |
| 向国華  | 1902 年 5 月～           | 23 | 〃   | 〃  | 汚陽   |      |
| 馬毓福  | 1902 年 5 月～1903 年 5 月 | 30 | 〃   | 〃  | 漢陽   |      |
| 周維禎  | 1902 年 5 月～1903 年 5 月 | 23 | 〃   | 〃  | 保康   |      |
| 沈明道  | 1902 年 5 月～1903 年 5 月 | 30 | 〃   | 〃  | 東湖   |      |
| 余徳元  | 1902 年 5 月～1903 年 4 月 | 29 | 〃   | 〃  | 房県   |      |
| 陳英才  | 1902 年 5 月～1903 年 4 月 | 20 | 〃   | 〃  | 漢川   | 両湖書院 |
| 王武玉  | 1902 年 5 月～           |    | 〃   | 〃  |      |      |
| 王 邑  | 1902 年 5 月～           | 21 |     | 自費 | 東湖   |      |
| 盧 弼  | 1902 年                | 27 | 〃   | 官費 | 汚陽   |      |
| 李書城  | 1902 年                | 20 | 〃   | 〃  | 潜江   | 經心書院 |
| 汪步揚  | 1902 年 5 月            | 28 |     | 〃  | 江夏   |      |
| 陳榮境  | 1902 年 11 月～          |    | 〃   | 自費 |      |      |
| 紀 鴻  | 1902 年～1903 年 5 月     | 26 | 〃   | 官費 | 武昌   |      |
| 施呼本  | 1902 年 5 月            | 21 |     | 〃  | 荊州駐防 |      |
| 阿勒精阿 | 1902 年 5 月～           | 28 | 〃   | 〃  | 荊州駐防 |      |

〔備考〕 蔭山雅博「宏文学院における中国人留学生教育について（２）」、『吟沫集』５、学習院大学史学会、1987年および「清末留学生会館第一次報告」清国留学生会館、1902年10月5日より整理した。

この名簿は、限られた資料に基づいて作成されたものであるので、すべての師範生の履歴について明らかにすることは出来ないが、1902（明治35）年に宏文学院に入学した留日師範生の来日前の状況の一端を知ることができる。表2によれば、（１）ほとんど官費生であったこと、（２）平均年齢は25.7歳であったこと、（３）来日前に經心書院、両湖書院の学生である者が多かったらしいことなどが読みとれる。

1902（明治35）年5月に入学した陳英才の回想によれば、「1902年に33名の師範生を派遣した。かれらは両湖書院の黄興、陳英才等10名、經心書院の李書城、李步青等数人、および江漢書院の何成浚等であった。両湖書院の師範留学生選抜においては、必ず梁鼎芬が自ら審査し、選ばれた師範生が、まず9月に武昌昱華に集り、集中的に日本語を勉強してから、翌年5月に赴日」した<sup>19)</sup>。陳英才の回想に照らしてみると、1902（明治35）年に宏文学院に入学した湖北省の師範生は、ほとんど両湖書院、經心書院、江漢書院から派遣されたと推測できる。

では、この3つの書院について少し紹介しておこう。經心書院は、1869（明治2）年に張之洞によって建設された湖北省における最も伝統のある書院の一つであった。建設された当初の授業科目として

清朝末期における留日師範生の教育実態に関する研究

は、経解、史論、詞賦が設けられた。1897（明治30）年に「中学為体、西学為用」の新しい経営方針の採用とともに、伝統的な経解（『春秋』、『左傳』、『周礼』などの經典に関する解釈）、史論（『史記』などに関する論述）、詞賦（中国の古典詩賦）の3科目を課外研究科目にし、新たに外政、天文、格致、製造の4科目を設け、その上に必修科目として算学を設けた。その後、さらに何回かの課程変更を経て、1899（明治32）年に至って經心書院の授業科目が四書大義・中国内政・兵法・天文・輿地・算学・經史となり、伝統の「經史辞章」を中心とするものから「中西結合」的なものに変化した<sup>20)</sup>。

1886（明治19）年末、張之洞は湖広総督に就任し、江漢と經心両書院を修復する一方、さらに資金を集め、両湖書院を建てた。新設の両湖書院では、經学、史学、理学、文学、算学、経済学などの新式科目が設けられたため、地元の多くの商人子弟を集めた<sup>21)</sup>。經心書院と同じように、両湖書院も課程改革を経て、1899（明治32）年の授業科目は經学・史学・輿地・算学・天文・兵法・格致・体操となり、西洋的な実学が伝統学に代わって重視されるようになった。

後年、張之洞によって実業教育機関として自強学堂が創設されたが、江漢經心、両湖三書院は依然として湖北省における数えられる代表的な書院であった。そこから選ばれた留日師範生たちは、いわば、全省の秀才（科挙の初級試験に合格したもの）であったため、もちろん史学、經学など伝統的な学問に通曉し、さらにある程度の西洋の実学教育も受けていた。

また、宏文学院の速成師範科で教授した松本亀次郎によれば、1906（明治39）年までは、留学生の大多数を占めたのは速成留学生で、「三四十歳以上の進士・舉人・貢生・附生などの資格を有し、現職を帯ぶる者が、講習的に派遣されるのが、大多数であった」。松本は自分の担当した四川速成師範科と直隸速成師範科の学生について次のような回想を残している。

直隸師範科には吳汝綸氏門下や嚴修氏門下の秀才が多くて、漢文のよく出来た人が、多数であったから、予が旧著言文対照漢訳日本文典の漢訳を修正してもらふのには非常に便宜を得た、同書の跋文を書いた高歩瀛氏（後に教育部の社会教育司長となり、予が北京に行った時には時文の先生として、教へを請うた人である）崔瑾氏、王振堯氏（民国元年参議院法政審査会常任委員）及び陳宝泉氏（後に教育部普通教育司長北京高等師範学校長）などは、其の尤であった。四川速成班にはかつて範源廉氏に抜擢せられて、教育部次長となった王章祐氏及び經亨頤氏などが居った<sup>22)</sup>。

ここから分かるように、直隸省と四川省から来た「秀才」の留日師範生のなかには、後に中国の教育高官になり、教育界で大いに活躍した人物が少なくなかった。

## 2 師範科教育の実態

速成師範科の修業年限は1ヶ年であり、授業科目は倫理学、日本語、算術、地理、歴史、博物学、物理学、化学、図画、音楽、体操、心理学、教育学、各科教授法、学校管理法、日本教育制度、実地授業であった。これら授業科目の履修において特徴的なことは、省別で班編成が行われたことである。そのため、同じ速成科でありながらも履修科目に若干の異同が生じ、在学期間が異なれば、履修科目及び科目数に変動が生じた。

以下は、1903（明治36）年5月に入学した直隸省23名の留日師範生が受けた授業科目である。注目したいのは、これらの授業科目の他に毎週1回の学校参観が行なわれたことである。ある意味では、短期間の速成師範生は、限られた時間数の授業内容より、毎週の学校参観や見学などを通じて、発達した日本の近代学校教育から感銘を受け、学んだものが大きかったいえよう。



表3 直隸省速成師範班授業科目

|                    |
|--------------------|
| 教育学（付心理学）          |
| 教授法（付教科書編纂法）       |
| 地理学（付地文学）          |
| 法政経済学              |
| 博物学（動物、植物、生理）      |
| 日本語文               |
| 教育制度（日本、欧米）        |
| 学校管理法              |
| 歴史学（近世外交史付）        |
| 数学（分数、小数、開平、開立、代数） |
| 理化学（物理化学実験）        |
| 体操（普通兵器、兵式）        |

[備考]王景愷『日遊筆記』、1904年、11頁（『晚清中国人日本考察記集成教育考察記』上、杭州大学出版社、1999年所収）より整理。

では、具体的に師範科ではどのような内容の授業が行われたのだろうか。この問題の解明については、蔭山も「江口辰太郎が担当した速成師範科の教育学の内容は、学術的教育学説の講述ではなく、中国近代を推進し、民族滅亡の危機を救う有為な人材に養成を意図する、江口独自の折衷的な内容を備えていた」<sup>23)</sup>と述べるにとどまっております、その解明はとても困難である。ここでは、師範科の各教職科目を担当した教員について分析することを通じて、できるかぎり宏文学院の師範教育の実態を探てみたい。

蔭山が作成した「宏文学院教職員一覧（明治35、5～39、11）」を基礎にし、『教育人名辞典』、『教育研究』、『教育』、『東京高等師範学校一覧』などを参照して師範科担当教員の履歴について作成したのが表4である。

表4 宏文学院師範科教職科目担当教員一覧

| 氏名    | 在職期間                  | 担当教科   | 在職中の身分          | 主な履歴                                                   |
|-------|-----------------------|--------|-----------------|--------------------------------------------------------|
| 江口辰太郎 | 1902（明治35）年7月～1903年9月 | 教育学    |                 |                                                        |
| 棚橋源太郎 | 1902（明治35）年11月～？      | 教科書編纂法 | 東京高等師範学校附属小学校訓導 | 兵庫師範学校、岐阜師範学校教諭、東京高等師範学校附属小学校訓導、東京高等師範学校教授、附属東京教育博物館主事 |
| 中谷延治  | 1903（明治36）年7月～1904年1月 | 教育学    | 東京高等師範学校附属中学校教諭 | 東京高等師範学校附属中学校教諭                                        |
| 大久保介寿 | 1904（明治37）年1月～1905年8月 | 学校管理法  |                 |                                                        |
| 樋口勘次郎 | 1904（明治37）年6月～1905年2月 | 教育学    | 東京高等師範学校教諭兼訓導   | 東京高等師範学校訓導、助教諭、教諭、文部省教員講習会講師、1900年に、フランス、ドイツ留学         |
| 増戸鶴吉  | 1904（明治37）年7月～1906年2月 | 日本教育制度 |                 | 東京高等師範学校附属中学校教諭（1909年時点）                               |

清朝末期における留日師範生の教育実態に関する研究

|        |                  |        |                          |                                                                                 |
|--------|------------------|--------|--------------------------|---------------------------------------------------------------------------------|
| 高島平三郎  | 1904（明治37）年11月～？ | 心理学    | 東洋大学講師                   | 東京高等師範学校、学習院、日本女子大学、長野県師範学校等の教員                                                 |
| 波多野貞之助 | ？                | 教育学    |                          | 茨城県師範学校教諭、東京高等師範学校教諭、ドイツ留学、東京高等師範学校講師、教授兼女子高等師範学校教授、東京高等師範学校附属中学校主事             |
| 小泉又一   | 1905（明治38）年？月～？  | 学校制度   | 東京高等師範学校教授兼附属小学校主事       | 沖縄師範学校校長兼学務課長。徳島中学、福島師範学校、和歌山中学教頭、東京高等師範学校教授兼附属小学校主事など歴任、ドイツ米国へ留学を経て、1907年文部視学官 |
| 小山左文二  | 1905（明治38）年9月～？  | 学校管理法  |                          |                                                                                 |
| 大橋銅造   | 1905（明治38）年？月～？  | 各科教授法  | 東京高等師範学校訓導兼教諭（1904年4月時点） | 東京高等師範学校訓導兼教諭、教授、（実地授業指導を担当）、附属教諭（1909年時点）                                      |
| 稲垣末松   | 1906（明治39）年1月～？  | 日本教育制度 |                          | 慶応大学教授                                                                          |

表4を概観して分かることは、各教職科目を担当した教員には、東京高等師範学校および同附属学校・附属小学校などの現職教授や教諭が多かったことである。師範教育と初等・中等教育の経験者が選ばれており、教職科目の担当者としては最適の陣容であったといえよう。また、これら教員のなかには、教育研究においても活躍していた人物が少なくなかった。いわば、当時の日本の師範教育および初等・中等教育の最先端に立っていた優秀な人物が招聘されたといえる。

次に、宏文学院在職中の身分が判明した各教員たちの担当期間中の教育活動について、もう少し詳しくみてみよう。

①棚橋源太郎 1902（明治35）年11月から、宏文学院で教科書編纂法を教授していた。東京高等師範学校附属小学校の訓導であった棚橋は、理科教授に関する研究において大いに活躍した人物であった。日本および海外の理科教授に関する新研究をよくし、1900（明治33）年に『小学理科教科書』を編纂、翌年に『理科教授法』を刊行した。1902（明治35）年、宏文学院の師範科教員として勤めるかたわら、『小学各科教授法』を発行した。これは師範学校の教科書として広く用いられた。同時期、『尋常小学における実科教教授法講義要領』（1902年）、『実用教授法』（1903年）、『理科教授法講義』（同年）、『小学理科教科書』、『小学校理科筆記帳』各4巻（1904年）、『小学における学校園』（1906年）、『尋常小学理科教授書』（1908年）などを精力的に著した。

②樋口勘次郎 1904（明治37）年6月から1905年2月までの間、東京高等師範学校教諭兼訓導として勤めるかたわら、宏文学院で教育学を担当した。ヘルバルト教育学の形式的な教授段階論を批判し、『統合主義新教授法』を著し、活動主義教育の提唱者として有名である。1900（明治33）年から教育学および教授法研究のため、3年間をかけてフランス、ドイツへ留学した樋口は、帰国してまもなく『国家社会主義新教育学』（1904年）『国家社会主義教育学本論』（1905年）などを著し、もっぱら国家社会主義を強調した。

③高島平三郎 1904（明治37）年11月から宏文学院で心理学を担当した。同時期東洋大学の講師として勤務していた。東京高等師範学校、学習院、日本女子大学、東洋大学などで教鞭を執りながら、主に児童学、心理学などを研究し、子どもの本性に基づいた家庭教育の必要を提唱する児童心理学者であり、明治30年代の日本における代表的な家庭教育論者であった。著書には『家庭教育』（1903年）、『家庭及び家庭教育』（1912年）『家庭における児童教育』（1922年）、『家庭における子女の教育』（1936年）などがある。

④小泉又一 中等学校および師範学校の教育現場で多くの実績を積んだ後、1905（明治38）年から東京高等師範学校教授兼附属小学校主事として勤務した。宏文学院では学校制度の教科を担当した。宏

文学院での教育に係わった時期に、『普通教育学』（1904年）、『教育心理学』（同年）、『教育史』（同年）、『欧米教育の実際』（1905年）などを著した。

⑤波多野貞之助 宏文学院での在職期間は不明であるが、履歴から分かるように、長年に渡って師範教育の畑を歩いた人物である。著書には『教育学附学校管理法』（1907年）などがある。

⑥大橋銅造 1905（明治38）年から、宏文学院で教えた。いつまで在職したのかははっきりしないが、宏文学院に勤め始めた時点の身分は、東京高等師範学校附属小学校訓導兼教諭であった。著書には『中等教員教授法 漢文科』（1910年）などがある。

⑦中谷延治 宏文学院で教育学を担当していた時期に、東京高等師範学校附属中学校教諭として勤めていた。宏文学院に在職した前後の著書に『教授法沿革史』（1901年）などがある。

以上にみてきた教職科目担当教員の履歴から、2つのことがいえる。第1は、宏文学院は主に師範教育や初等・中等教育現場の事情に通暁する教員を招聘したことである。教員任用の面からみると、短期的な教育を通じてすぐに教育現場に立てるような教員の育成が求められていた速成師範科の主旨に合致していたといえる。

第2は、教育理論研究の分野で活躍していた教員が多かったという面からみれば、その教育内容は当時の日本の教育界における新しい教育思潮を含んでいた可能性があることである。もちろん実際の教授においては、留日師範生たちが来日前に受けた教育の質や、言葉などの現実問題があり、通訳を通じて行われた授業の教育水準は、大きな制限をもっていたに違いない。しかし、これだけ充実した教員たちの陣容を考えると、その教育内容は当時の中国人留学生にとって決して低い水準のものではなかったと考えられる。

### 3 宏文学院の改組および速成師範科の廃止

清末中国人の日本留学は、1905（明治38）年から1906年にかけて頂点に達し、その数は8,000名を超え、宏文学院への留学生はこの時期5,000名に達していた<sup>24)</sup>。このような留学生の激増は、必然的に留学機関の教職員や教育設備などの拡充を要求したが、実際この要求に応じたものはほとんどなかった。「学店」・「学商」と言われる留学生相手の営利事業と、留学生の質の低下という深刻な社会問題を惹起し、速成教育に対する批判が日本国内から噴出した。

1906（明治39）年以後、清政府は速成留学生の派遣を中止し、中学程度まではなるべく自国内で教育する方針をとるようになった。これは清政府が日本留学における「速成教育競争の弊風」に気づいたのも原因であるが、数多くの速成師範生が帰国し、各地の学堂が彼らによって充たされたのも一因であった<sup>25)</sup>。この時期中国国内でも、師範学校や法政専門学校など各種の学校が設置せられ、速成的留学生の派遣もその必要性が失われてきた。

1906（明治39）年2月19日、日本の文部省にあたる学部は、各省に「選派遊学制限弁法」を通告し、留学生資格の基準について「凡ソ高等以上ノ学校及ビ専門学校ニ入ラント欲スル者ハ、必ズ中学以上ノ卒業ノ程度アリ、且ツ彼ノ国ノ語文ニ通習スレバ、方ニ及格ト為」し、「速成科ヲ学フ者ハ、或ハ法制、或ハ師範、必ズ中学（漢学）ト中文俱ニ優レ、年25歳以上、学界・政界ニ於て実ニ経験アル者ヲ須ツテ、方ニ及格ト為スベシ」と指示した<sup>26)</sup>。さらに同年同月政府は各省あてに速成留学生の派遣停止を命令、速成教育制限措置を固めた。

一方日本側でも、留学生受け入れ体制の一環として、文部省は1905（明治38）年省令第19号を制定し、「清国人ヲ入学セシムル公私立学校ニ関スル規定」を提示し、留学教育に対する管理を強めた<sup>27)</sup>。このような日清両国からの留学教育に関する具体的措置は、留学生教育の指定校であった宏文学院、東洋大学、早稲田大学などを動かして、1907（明治40）年「中国留学生教育協議会」を設立せしめ、速成科の停止、普通科の修業年限の延長の決議を余儀なくさせたのであった。

また留学生の質的向上をはかるために日清両国で「五校特約」が協議され、1907（明治40）年8月に協定が結ばれた。これは官立の高等専門学校への入学が収容定員の枠に阻まれて未だ入学できない留学生を、今後15年間に第一高等学校、東京高等師範学校、東京高等工業学校、山口高等商業学校、千葉医学専門学校に毎年計165名の入学を許可するというものであった<sup>28)</sup>。この協定により師範留学の中心が、速成教育から高等師範教育へ移り、師範留学の中心校も宏文学院に代わって東京高等師範学校となった。これに伴ない、1907（明治40）年以降、宏文学院は、速成科の廃止、普通科の修業年限の延長、教育内容の充実といった改革を行った。教育の質は向上し、高等教育機関への進学者数が増加した。とくに、東京高等師範学校への進学者が大幅に増加したことを注目すべきである。蔭山の研究によれば、1908（明治41）年度の東京高等師範学校への進学人数は29名で、翌年は19名であった<sup>29)</sup>。

#### Ⅳ 東京高等師範学校における留日師範生教育

##### 1 中国人留学生の受け入れ

東京高等師範学校がいつ頃から中国人留学生を正式に受け入れ始めたのかについては、明確な資料が残されていないので定かではない。二見剛史が東京高等師範学校においては、「特約制度成立以前から留学生若干を受け入れており、その教育については見るべき点が多いと予想されるが、この時期の詳細を伝える資料がまだ発見されていない」<sup>30)</sup>と述べたように、この時期の状況を明らかにするのは非常に難しい。経志江は「東京高師が最初に留学生を募集した年は1906年度であった」<sup>31)</sup>と述べたが、筆者はもっと早い時期から中国人留学生を受け入れていたと考える。

1896（明治29）年に東京高等師範学校長嘉納治五郎は、中国政府から最初の中国人留学生13名の教育を依頼された。これら13名の留学生は、午前と夜は、嘉納の開いた塾で外交史、日本文法、日文书写などを学習する一方、午後は東京高等師範学校に行き、「棍棒体操、初級格致学、高等格致学、初級算学、高等算学、兵式体操、歴史」などの授業を受けた<sup>32)</sup>。これが東京高等師範学校が受け入れた最初の中国人留学生であった。13名のうち、中途退学した6名を除いて、7名（唐宝鐸、朱忠光、胡宗瀛、敢翼軍、呂烈煌、馮閭謨、金維新）が優秀な成績をもって修了した。嘉納の評価によれば、彼らが卒業した時の実力は「東京高師附属中学の3～4年の程度」であった<sup>33)</sup>。

東京高等師範学校における初期中国人留学生のことを知るために、筆者は当時日本国内で発行されていた雑誌記事を調べた。残念ながら、茗溪会機関誌『教育』は中国人留学生に関する記録が非常に少なく、最初の記録としては、僅かに1908（明治41）年4月に4名の中国人留学生が聴講生として卒業したという記録がみられるに過ぎない<sup>34)</sup>。また、『教育時論』『東亜時論』の記録によれば、1899（明治32）年8月には、東京高等師範学校にはすでに中国人留学生8名が在籍していたことが分かった。『東亜時論』の「中外時事」欄の「清国の留学生」という記事をみてみよう。

高等師範学校内の留学生は元八名なりしが、其数次第に減じ今は残り少なくなりしも日本語の習修には最熟し其内一人は過般同国公使館の通訳書記に採用せられ其他は尚ほ同校に在りて勉学せり一人は駒場農科に入り現にその簡易科を修習中なり又私費生として王子養蚕伝習所に入り成績頗る可なるものあり<sup>35)</sup>。

この記録によれば、1899（明治32）年8月には、少数だが東京高等師範学校に中国人留学生が在籍していた。この数少ない留学生たちのうち、東京高等師範学校で主に日本語を修習し、東京高等師範学校を経て、さらに帝国大学の農科や養蚕伝習所などに進学した者がいた。これは当時の留学生予備

教育機関がまだ整っていない実情を表すと同時に、当時師範教育ではなく実業教育を重視していた清政府の留学生派遣政策の影響がうかがえる。

次に、『文部省年報』によって東京高等師範学校の中国人留学生数に関する統計を整理してみた(表5を参照)。

表5 東京高等師範学校における中国人留学生数

| 年度            | 聴講生人数 |      | 入学希望者 |      | 入学者  |      | 卒業者  |      |
|---------------|-------|------|-------|------|------|------|------|------|
| 1904 (明治37) 年 | 13名   |      |       |      |      |      |      |      |
| 1905 (明治38) 年 | 10名   |      | 3名*   |      | 3名*  |      |      |      |
| 1906 (明治39) 年 | 1名    |      | 1名    |      | 1名   |      |      |      |
| 1907 (明治40) 年 |       |      |       |      |      |      |      |      |
|               | 本科    | 予科   | 本科    | 予科   | 本科   | 予科   | 本科   | 予科   |
| 1908 (明治41) 年 | 30名   | 32名  |       |      |      |      |      |      |
| 1909 (明治42) 年 | 60名*  | 30名* | 33名*  | 82名* | 33名* | 30名* | 3名   | 27名* |
| 1910 (明治43) 年 | 76名   | 29名  | 25名   | 27名  | 25名  | 27名  | 18名* | 21名* |
| 1911 (明治44) 年 | 75名   | 35名  | 21名   | 68名  | 21名  | 29名  | 10名  | 3名   |
| 1912 (大正1) 年  | 51名   | 37名  | 3名    | 13名  | 3名   | 6名   | 2名   | 0名   |

[備考] 『文部省第31年報』～『文部省第40年報』より整理。\*は「外国人数」であり、中国人留学生以外の留学生を含んでいる可能性がある。

表5によれば、東京高等師範学校では1904 (明治37) 年にすでに聴講生としての留学生を受け入れていたことが分かる。したがって「東京高師が最初に留学生を募集した年は1906年度であった」という経の指摘は訂正されるべきだと考える。また入学者数をみると、毎年度の本科合格者は前年度の予科卒業者であったことが分かる。つまり、予科さえ卒業できれば本科への進学は容易であった。しかし、予科への入学率や予科生の卒業率は相対的に低かった(表6を参照)。

表6 1909年度～1912年度東京高等師範学校留学生の予科入学率・卒業率

| 年度            | 予科生の入学率 | 予科生の卒業率 |
|---------------|---------|---------|
| 1909 (明治42) 年 | 36.6 %  | -       |
| 1910 (明治43) 年 | 100 %   | 70 %    |
| 1911 (明治44) 年 | 42.6 %  | 10.3 %  |
| 1912 (明治45) 年 | 46.2 %  | 0 %     |

## 2 中国人留学生教育の実態

では、予科生として入学した留学生たちは東京高等師範学校でどのような学習生活を送ったのか。資料がほとんど残されていないため、東京高等師範学校における留学生教育の実態を再現することはとても困難であるが、ここでは、僅かな資料によって分析を試みてみたい。

まず、留学生の受講科目についてみてみよう。1901 (明治34) 年11月11日に定められた「文部省直轄学校外国人特別入学規程」の第1条によれば<sup>36)</sup>、「外国人ニシテ文部省直轄学校ニ於テ其一般学則ノ規程ニ依ラス所定ノ学科ノ一科若ハ数科ノ授業ヲ受ケントスルモノハ外務省在外公館又ハ本邦所在

## 清朝末期における留日師範生の教育実態に関する研究

ノ外国公館ノ紹介アルモノニ限り特ニ之ヲ許可スルコトアルベシ」とあり、これに従って中国人留学生は入学したと考えられるので、受講科目においては、ある学科の1科目あるいは数科目だけを受講した者が多かった。

次に、1911年（明治44年）までの東京高等師範学校卒業留学生の専攻科目を表にしてみよう（表7を参照）。

表7 東京高等師範学校卒業留学生専攻科目一覧（1908～1911年）

| 名前  | 卒業年度        | 専攻科目             | 身分  | 原籍 |
|-----|-------------|------------------|-----|----|
| 許寿裳 | 1908(明治41)年 | 教育、地理、西洋史        | 聴講生 | 浙江 |
| 章毓蘭 | 〃           | 教育、植物、動物         | 〃   | 〃  |
| 銭家治 | 〃           | 教育、地理、西洋史        | 〃   | 〃  |
| 談錫恩 | 〃           | 教育、植物、動物         | 〃   | 湖北 |
| 陳英才 | 1909(明治42)年 | 教育、化学            | 〃   | 〃  |
| 張邦華 | 〃           | 〃                | 〃   | 浙江 |
| 毛邦偉 | 〃           | 倫理               | 〃   | 貴州 |
| 王海鏘 | 1910(明治43)年 | 法制経済             | 〃   | 河北 |
| 黄際遇 | 〃           | 数学               | 〃   | 広東 |
| 朱文熊 | 〃           | 化学               | 〃   | 江蘇 |
| 陳衡格 | 〃           | 植物、動物、生理衛生、農学    | 〃   | 江西 |
| 鄧瑞槃 | 〃           | 化学               | 〃   | 広東 |
| 陶履恭 | 〃           | 地理、西洋史、法制経済      | 〃   | 直隸 |
| 王 脩 | 1911(明治44)年 | 博物学部             | 本科  | 福建 |
| 何瑁先 | 〃           | 植物、動物、生理衛生、農学    | 選科  | 〃  |
| 牛宝善 | 〃           | 倫理、教育、地理、歴史      | 〃   | 河北 |
| 経亨頤 | 〃           | 数学               | 〃   | 浙江 |
| 黄恭憲 | 〃           | 教育、数学            | 〃   | 湖北 |
| 洪彦遠 | 〃           | 数物化学部            | 本科  | 浙江 |
| 任 誠 | 〃           | 教育、数学            | 選科  | 江蘇 |
| 張貽惠 | 〃           | 数物化学部            | 本科  | 安徽 |
| 杜 蘭 | 〃           | 博物学部             | 〃   | 広東 |
| 鳳 高 | 〃           | 〃                | 〃   | 湖南 |
| 彭世芳 | 〃           | 〃                | 〃   | 江蘇 |
| 葉 謙 | 〃           | 教育、植物、動物、生理衛生、農学 | 選科  | 浙江 |
| 楊昌寿 | 〃           | 〃                | 〃   | 湖北 |
| 楊立奎 | 〃           | 物理、化学            | 選科  | 安徽 |
| 劉以鐘 | 〃           | 数物化学部            | 本科  | 浙江 |
| 劉 煥 | 〃           | 倫理、教育、地理、歴史      | 選科  | 河北 |
| 林元喬 | 〃           | 数物化学部            | 本科  | 福建 |
| 林道容 | 〃           | 植物、動物、生理衛生、農学    | 選科  | 〃  |

〔備考〕東京高等師範学校の各年度の『一覧』より作成。

表7から分かるように、清末までの東京高等師範学校卒業留学生のうち、専攻科目においては、1科目だけを受けた者もいるが、多い場合は5科目を受けた者もいた。とくに筆者の興味を引いたのは、最初の年度の卒業生を除いて、教育という科目を履修しなかった卒業生が案外に多かったことである。留学生の試験に関しては、1907（明治40）年4月に発布された東京高等師範学校「聴講生受業心得」第4条によれば「聴講科目ニツキテハ本校生徒ト同シク試験ヲ受クベシ」と、また「学科ヲ修了シ相当ノ成績ヲ得タル者ニハ卒業証書を授与ス」（1908年6月17日、東京高師「外国人特別入学規則細則」第3条）と規定されたのである。つまり、受講科目数の上では留学生は日本人と区別され、特別に扱われたが、試験においてはまったく日本人学生と同じであった。

日本人学生と同じ試験を受け、そして卒業証書も与えられた。しかしながら、1科目あるいは数の少ない数科目しか受講しなかった留学生に対して、何を基準に評価し、そしてどのような卒業証書を与えたのかなど留学生教育の具体的状況に関しては不明な点が多い。

次に、留学生を受け入れ始めた当時の東京高等師範学校の学科目、課程状況をみてみよう。1900（明治33）年1月の文部省令によって東京高等師範学校の学校規則が改正され、それまでの文科・理科の別を廃し、予科・本科・研究科の3科に分けられた。学校規則によれば、予科は修業年限が1カ年であり、「本科に入らんとするものをして必ず之を経由」しなければならなかった。その学科目は倫理・国語・漢文・英語・論理学・数学・音楽・体操であった。本科は4つの学部に分かれており、それぞれの学科目は表8のようであった。

表8 東京高等師範学校本科の学科目（1901年）

| 学部   | 必修科目                                            | 専修科目   | 随意科           |
|------|-------------------------------------------------|--------|---------------|
| 第一学部 | 倫理、教育学、心理学、国語、漢文、英語、ドイツ語（フランス語）歴史、哲学、言語学、生物学、体操 | 国語漢文   | 法制経済、または音楽    |
| 第二学部 | 倫理、教育学、心理学、哲学、地理、歴史、法制経済、英語、生物学、体操              | 地理歴史   | 国語、漢文、ドイツ語、音楽 |
| 第三学部 | 倫理、教育学、心理学、数学、物理学、化学、哲学、英語、図書、手工、体操             | 数学物理化学 | ドイツ語、生物学、音楽   |
| 第四学部 | 倫理、教育学、心理学、植物学、動物学、生理学、鉱物学、地学、農学、哲学、英語、図書、体操    | 博物学農学  | 化学、ドイツ語、音楽    |

〔備考〕『創立六十年』東京文理科大学、1931年、57-58頁より整理。

表8が示すように、倫理、教育学、心理学、英語、体操が各学部の共通科目であった。1903（明治36）年1月に文部省令をもって学校規則がさらに改正された。本科は国語漢文部、英語部、地理歴史部、数物化学部、博物学部の5部に分かれ、具体的な改正の要項は大要次のようであった<sup>37)</sup>。

国語漢文においては英語の時間数を増加して新たに東洋史を課す。

英語部においては国語漢文の時間数を増加して新たに西洋史を課す。

地理歴史部においては哲学・生理学を除き、国語漢文を加え、英語の時間数を増加する。

数物化学部において哲学を除き天文・気象を加える。

博物学部においては哲学を除いて衛生を加え、地学を地質学へ改める。

こうして改定された課程がその後、明治期の終わりまで続いた。

## V おわりに

以上、留日師範教育の中心校であった宏文学院と東京高等師範学校を中心に、清末留日師範生の教育実態について考察した。まず、宏文学院師範科の教育実態をある程度に明らかにした。具体的には、学院長嘉納治五郎の師範留学生教育に関する考え方に基づいて行われた宏文学院師範科教育の趣旨、特質を明らかにした上、蔭山たちの研究が明らかにし得なかった師範生来日の経緯、来日前の履歴、および師範科の教員陣容などを解明した。

次に、東京高等師範学校の留学生受け入れの実態を解明した。具体的に、東京高等師範学校がいつ頃から中国人留学生を受け入れ始めたのかについては、雑誌記事などの史料を使って先行研究の誤りを訂正した。また、『文部省年報』の統計を参考にして、1904（明治37）年度から1912（大正元）年度にかけての東京高等師範学校への留学生の入学者数・在学者数・卒業者数について明らかにした。

しかし、本論文で課題がすべて明らかになったわけではない。とくに、宏文学院師範科と東京高等師範学校の留学生教育の具体的な内容については、史料が極めて少ないため不明な点がまだ多く残されている。これについての研究を今後の課題にしたい。

### 註：

- 1) 田正平『留学生与中国教育近代化』広東教育出版社、1996年、318-319頁。
- 2) 蔭山雅博「宏文学院における中国人留学生教育」、『日本教育史学』第23集、1980年など。
- 3) 実藤恵秀『中国人日本留学史』増補版、くろしお、1970年、37-38頁。
- 4) 『同仁』第18号、1907年11月10日、31頁。
- 5) 註4)に同じ。
- 6) 1905年11月2日、文部省は省令第19号をもって「清国人ヲ入学セシムル公私立学校ニ関スル規程」を公布したが、清国留学生の公私立学校への入学を厳しく規定したので、留学生に「取締規程」と呼ばれ、猛烈な反対運動を招いた（実藤恵秀『中国人日本留学史稿』日華学会、1939年、125頁）。
- 7) 註3)に同じ、67-68頁。
- 8) 蔭山雅博「宏文学院における中国人留学生教育の展開」、『教育のなかの民族 日本と中国』明石書店、1988年、140頁。
- 9) 『宏文学院一覽』（明治39年）。註2）、60頁より重引。
- 10) 「嘉納氏の清国留学生談」、『教育時論』第622号、1902年7月25日、37頁。
- 11) 「清国に於ける嘉納治五郎氏」、『教育時論』第627号、1902年9月15日、34頁。
- 12) 1906年6月、清政府は各省に速成留学生の派遣を停止すべき命令を発した。
- 13) 『太陽』第13巻第1号、1907年1月、52頁。
- 14) 繆荃孫『日遊彙編』、3-9頁。『晚清中国人日本考察記集成 教育考察記』下、杭州大学出版社、1999年所収。
- 15) 関庚麟『日本学校図論』、183頁。『晚清中国人日本考察記集成 教育考察記』上、杭州大学出版社、1999年所収。
- 16) 『中国近代学制史料』第二輯下冊、華東師範大学出版社、1989年、446-447頁。
- 17) 黄新憲『中国留学教育の歴史的反思』四川教育出版社、1991年、82頁。
- 18) 『第一次教育年鑑』記四川省辦師範学堂概況、『中国近代学制史料』第二輯下冊、華東師範大学出版社、1989年、452-453頁。
- 19) 陳英才『兩湖書院憶聞』、田正平『从湖北看中国教育近代化』広東教育出版社、1996年、192頁（重引）。



- 20) 田正平 同前書、75-76頁。
- 21) 呉貽谷主編『武漢大学校史』武漢大学出版社、1993年、2-3頁。
- 22) 松本亀次郎『中華留学生教育小史』東亜書院、1931年、18頁。
- 23) 註2)に同じ、69頁。
- 24) 註2)に同じ、72頁。
- 25) 註3)に同じ、85頁。
- 26) 註25)に同じ。
- 27) 蔭山雅博「宏文学院における中国人留学生教育」、『日本教育史学』第23集、1980年、73頁。
- 28) 二見剛史「戦前日本における中国人留学生予備教育の成立と展開」、『国立教育研究所紀要』第94集、1978年、63頁。
- 29) 註2)に同じ、76頁。
- 30) 註28)に同じ、64頁。
- 31) 経志江「明治末期東京高等師範学校における中国人留学生教育の成立」、『教育学研究紀要』第1部第46巻、中国四国教育学会、2000年、172頁。
- 32) 王桂『中日教育関係史』山東教育出版社、1993年、474頁。
- 33) 註3)に同じ、39頁。
- 34) 『教育』第302号、茗溪会、1908年4月15日、33頁。
- 35) 『東亜時論』第18号、東亜同文会、1899年8月25日、54-55頁。
- 36) 『東京高等師範学校一覧』(1902年4月～1903年3月)、39頁。
- 37) 『創立六十年』東京文理科大学、1931年、60頁。